

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 口 甲口保 乙 口 乙口保 口 修	第 504号	氏 名 栞富 由佳子
審 査 委 員	主 査 松香 芳三 副 査 岩崎 智憲 副 査 尾崎 和美		

題 目

Mouth breathing reduces oral function in adolescence  
 (青年期における口呼吸は口腔機能を低下させる)

要 旨

口呼吸は口腔内の乾燥やう蝕、歯周病との関連のみならず、顎顔面の成長発育や不正咬合との関連が示唆されており、その重要性が指摘されている。一方、舌機能は乳幼児期の吸啜から、その後の咀嚼、嚥下に至るまで非常に重要な役割を果たすことが知られているが、口呼吸者における舌機能を含めた口腔機能の実態および顎顔面形態、そしてそれらの関連は明らかにされていない。本研究では、今日まで全く検討されていない青年期における口呼吸、鼻呼吸を含めた呼吸様式と舌運動機能を含めた口腔機能および顎顔面形態との関連を検討した。

幼少期から定期管理を継続している患者103名(平均年齢16.6±2.7歳)を被検者とした。呼吸様式は聞き取り調査で判定し、顎顔面形態は、側面頭部エックス線規格写真で評価した。分析には、SNA、SNB、FMA、ANS-Me、PNS-Pのほか、舌骨の位置に関するMP-H、C3-H、Me-Hの各値を用いた。口腔機能として、最大咬合力、咬合接触面積、口唇閉鎖力、舌圧、咀嚼能力を測定した。また、不正咬合の有無についても調査した。なお本研究は、徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認(承認番号:3912)を得て行った。被検者のうち口呼吸者の割合は20.4%であった。また、不正咬合の有無と呼吸様式の間に関連は認められなかった。FMA、ANS-MEの値に関して、鼻呼吸者、口呼吸者の2群間で有意な差が認められた。舌骨の位置に関し、C3-Hは鼻呼吸者、口呼吸者の2群間で有意な差が認められた。口腔機能に関しては、口唇閉鎖力、舌圧、咀嚼能力において口呼吸者が鼻呼吸者と比較して有意に低い値を示した。本研究結果より、青年期における呼吸様式に対して口腔機能の中でも舌機能、およびそれに関連する顎顔面形態が影響することが示唆された。

以上より、本研究は歯科医学の発展に寄与する研究内容であり、申請者は当該分野における学識と研究能力を有していると評価し、博士(歯学)の学位の授与に値すると判断するものである。